

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



小説 朋宮飯鹿

挿絵 のりたま

第一章	憂鬱な始まり	006
第二章	妹騎士の誘惑	021
第三章	天才騎士の挫折	056
第四章	姫騎士の嫉妬	101
第五章	わがまま姫の秘め事	127
第六章	勝負の行方	164
第七章	姫騎士の破瓜	173
第八章	騎士見習いの淫宴	200
第九章	そして騎士は……	249

登場人物紹介

Characters



レティーティシア・ウイス・クロードィア

クロードィア王国の第二王女。性格の悪さから「鬼姫」と呼ばれている。



シズル・リクトー

騎士の名門リクトー家の娘。プライドが高く、自分にも他者にも厳しい。



エクエスタ・エイシア

クロエの従妹。明るく朗らかで、誰とでも友達になれるタイプ。

クロエ・フライハイト

三年前に行われた隣国との戦争で活躍した英雄。今は隠居暮らし中。

ほっそりとした長い指で顎や乳房にこびりついた白濁をこそいでは、さも美味しそうに口へと運ぶ少女。うっとりとした目は欲情して潤みきっていた。粗方を拭い取った少女は名残惜しげな顔で指に移った精液の生臭い味をしゃぶる。

「はむはむ……ぴちゃぴちゃ、れるおっ……にー様の味、しなくなっちゃった……」

いよいよ味も臭いも消え去り、自分の唾の味しかしなくなったところで、エクエスタはようやくクロエへと向き直り、スペルマで生臭くなった息を吐きながら言葉を紡ぐ。

「それじゃにー様 あ、ボクの……初めてのの人に、なつてください……♪」

「……あ、ああ……」

掠れた声で了承の言葉を返し、ころりとエクエスタを風呂の洗い場に仰向けに寝かせた。むっちりとした両脚をがに股に開かせて、両手で脚を閉じさせないように押さえつける。仰向けに引つ繰り返されたカエルのような屈辱的な姿勢は、覚悟を決めた少女であっても恥ずかしい。真っ赤に染まった顔を両手で隠して、指の隙間からチラチラとクロエを見る。

「にー様、そんなにじっくり見ちゃ、恥ずかしいよお……」

むっちりと肉付きのいい身体をしているエクエスタだったが、腰回りの豊満さは本当に年若い少女とは思えないほど充実している。肉厚の陰唇からは鶉色とぎのラヴィアが僅かにはみ出しており、パクパクと口を広げてはしたなく涎よだれを滴らせている。蜜壺から流れた淫液が太股や股座を伝い落ち、下敷きになったもっちり尻肉をしとどに濡らしてしまうほどにエクエスタは濡れやすい身体をしていた。

「エクエスタのここは、ぬかるんで大変なことになっているな。流石エツチな娘だ」

——くちゅ……。

クロエはいきり立った己の分身を、前戯の必要もないくらいドロドロにぬかるんだ肉アケビへと押し当てる。今更、「いいのか？」などと野暮なことを確認するつもりはない。

——ぐちゅっ……ぐ、にゅぶぶぶつ。

熱く潤った処女陰唇は、そそり立った青年の肉棒をゆつくりと呑み込んでいく。事前に数回の絶頂を迎えていたため、少女のエントランスは柔らかく緩んでおり、特段痛がることもなく順調に肉棒を咥え込む。

そして、コツンと何かが亀頭先端に当たる感触。エクエスタの処女おとめの証を確かめたクロエは、潤んだ眼差しを自分へと向ける少女に囁きかける。

「それでは、挿れるぞ……？」

「はあああ……う、うんっ！ にー様のおつきなオチンチンで、ボクが一生にー様のものだって、にー様だけのものだってしっかり刻み込んでえ……ぎッ！」

——ずぶぶぶぶうっ！ ぶちんつつっつ！

宣言通りに、青年は荒々しく腰を一気に押し込んだ。処女膜を突き破り、蜜壺の奥底へと肉棒を強引に突き込む。エクエスタの下腹に一瞬だけジンと響くような痛みが走り、淫猥な裂け目から零れた蜜液に一筋、赤色の流れが交じった。

「痛みを長引かせないように一気にいったが……大丈夫か？」

眉を寄せて痛みを堪えるように身体を強張らせた少女へ、心配そうに声をかける。膨らみ珠となった涙を指で拭ってやると、ゆっくりと目を開いて小さな笑みを浮かべる妹騎士。「ん……最初は痛かったけど、何かすぐに消えちゃったから、大丈夫……ふあっ！」強がりかとも考えたが、もぞりと胎はらの中で肉棒が蠢はよいて上がった声には色艶が混じっている。本当に痛みはなくなり、快感として感じるように蜜壺は適応しつつあるらしい。

一応確認とばかりに、蜜壺の奥まで突き刺さったままのペニスをグリグリ動かしてみると、未踏地だった子宮の入り口を擦られてしまったエクエスタは「ひゃあんっ！」と甲高い嬌声を上げて身体をよがらせる。

「にいさまあ……もう大丈夫だからあ……にいさまの動きたいように、動いてえ……」甘く蕩けた声で告げるエクエスタの顔は、悦楽で淫猥に歪んだ笑みを貼りつけている。

「く……う、動くぞ……っ！」

久しぶりに堪能する女唇の熱さに興奮し、クロエはゆっくりと腰を使い始めた。

——にゆる、にゆちい……くにゆるっ。

「くふうっ！ ひゃうんっ！ に、にいさ……はあああんっ!!」

膣内で折り重なった肉壁がねつとりと柔らかく肉棒に絡みつき、裏筋や雁首の裏をくすぐる感触がこそばゆくも気持ちいい。くねる腰の動きに合わせるように、にゆるにゆると膣壁を蠕動ぜんどうさせる少女は、快感の余り口の端から涎を零しながら咽喉を仰げ反らせていた。

——ぶるんっ！ ぶるっぶるるんっ！

少女のだからしないGカップ乳房が、挿入のリズムに合わせてブルブルと胸板の上ではしたなく暴れ狂う。根元から目一杯引き伸ばされた乳房は、クロエの厚い胸板や少女のなだらかな腹、そしてくしゃくしゃに歪んだ顔をびたんびたんと打ち据えて快音を立てる。

「くひっ!? おっぱいっ、おっぱいがあつ——ぶるぶるつてえ! ひっ、ぎいっ——ち、ちぎれちゃうううううっ!?」

——じゅぷうっ、じゅぷぷぷっ! ぶちゆうっ!!

栓が壊れたのではと思うほど、滾々と愛液を淫蜜壺から湧き立たせる。しかし、締めつけが緩みすぎることではなく、やんわりとした雌アワビの熟肉がしっとり肉棒を包み込む。

「ひゃあんっ! ひい、ひゃふうううんっ! にいさまのおチンチン、ボクのお腹の中でぐりぐりいってえ、暴れてるう——うひいひいひいひいっ♪」

——ぐちゅんっ、ぶちゅんっぬぷにゅぷっ!

ペニスの雁首で膣から掻き出された愛液がジュポジュポと淫らな水音を大音量で掻き鳴らし、エクエスタは粘ついた飛沫を風呂場の床一面に撒き散らす。

「もっとお! もっともっとお、ボクのいやらしいオマ○コ、いじめてえっ! にいさまのおチンチンでいっばいいいじめてえっ!! めちやくちやにしてほしいのおっ!!」

きゅ、きゅうっ——被虐的な興奮に染まった少女の蜜壺は締めつけを増した。

——ぐちゅっ、ごりいっ! ぐにゅぐりゅっ!! がりんっ!

望みの通り、クロエはわざと膣壁を抉るえぐように肉棒を突き立て、張ったエラで壁を

ら削ぐように強く擦り、エクエスタの淫乱ヴァギナを責め立てる。

「いぎいいっ！ いいよお……にいしやまあ、オマ○コお、オマ○コきもちいいろお——
うひいいんっ！ ひゃ、ふううっ!？」

妹のように思っていた愛しい少女を犯し、処女を奪った背徳感、青年の中で強い興奮に変わる。遠慮も見せずに荒々しく腰を振り、怒張したペニスで少女の淫腔を騷る。

「にいひやまあっ！ ボクのらか、きもひいいっ？ れえ、きもひいいいかにやあっ!？」
「ああ、熱くてドロドロで、柔らかくて……最高に気持ちいいぞ……！」

「うれひいいい……っ♪ ひゃん、ひゃううううんっ♪」

蜜液の飛び散る水音と、たわわな乳房が肉を打ち据える音、そして少女の甘く蕩けた卑語交じりの嬌声をBGMにして、ぐいぐいと青年のテンションは上り詰めていく。

——びちんっ！ ぶるっ、ばちんっ！ びち、ぼゅんっびちんっ!!

「あふうんっ、あんあんっ——ひっ、あひいいいいっ！ むぶっ!？ いくう……もういっちやうう！ にいひやまのおにんにんれえ、ボクもういっひゃううううっ!？」

ぶるんぶるんと暴れる乳ピンタを自分に食らわせながら、切羽詰まった声で悲鳴を上げるエクエスタ。余裕などどこにもなく、すぐにでも絶頂に達してしまいそうな様子だ。

「ぐう、エクエスタ……俺も、もう少しで……くっ！ 出てしま……っ!!」

「いっひよにいっ！ ふみい——にいひやまつ、ぽきゅといっひよにい!! いっひよに、
いこうよおっ！ れえ、いっひよ——ひゃぐうっ!!」

袋の奥で寧丸がきゅっと引つ込み、尿道をぞわぞわと駆け上る感覚が背筋を震わせる。

「らひてえっ！ いっっぱいい、どびゅどびゅってえ、ぼくのなか、らひてええっ!!」

少女の懇願を聞き遂げ、クロエはパンパンに張り詰めた肉棒で子宮壁を抉り、決壊寸前の熱い滾りを一気に解放した。

——どびゅっ！ ぶびゅるるるるっ！ ぶぼっ、ぶばばばっ!!

「あふううううううううううううううううううんっつ！」

溜まりに溜まった雄の欲情は、とうとう狭苦しい腔内へと弾けるように噴き出した。

解き放たれた妊娠液は勢いよく少女の淫壺を蹂躪する。煮え滾ったマグマのように熱い白濁液に、敏感すぎる膈を焼き尽くされるような灼熱感。エクエスタは菌ぎりするほど強く口を嘔み締めて絶頂の悲鳴を堪える。

「ぎっ……うひいうう……っ！ あちゅい……おなかあ、やけひやううう……っ！」

——ぶぶっ！ びゅるっ、びゅくう……っ。

子宮袋を内側から滅多打ちにし、狂ったように暴れるスペルマも、次第に噴出する勢いをなくしていく。鎌首をもたげた化物の口から吐き出される白濁吐息は、とうとう種が尽きたのかチロチロと未練たらしく糸を引きながら滴り落ちるだけ。

「あ、ああ……はああ……♪ にいひやまのが、あっちゅいいい……♪」

吐き出すものを吐き出し、硬さが失われた肉棒をずるりと引き抜くクロエ。

——ずるっ……ぶぶっ、びゅるびゅる……っ。



「くっ……クロエ殿は、変態だっ……！ こんな卑猥な縛り方をするなんて……」

「ならば、卑猥な縛られ方で喜んでいるお前も立派な変態だな。変態は変態同士、気が合
つていいじゃないか」

キユンと下腹に甘い疼きが走る。トロトロと髭だらけの下の口から涎を滴らせて、少女
騎士は小さく声を漏らす。

「貴公と一緒に……それなら、いいかも……っ」

「それでは、シズルの初めてを頂くことにしようか」

少女の膝裏に手を差し入れて身体を持ち上げ、体勢を入れ替える。股座を跨らせ、騎上
位の格好となった少女の膣口に勃起先端が触れると、彼女は息を呑んでしまう。

「くっ……き、貴公がどうしても入れたいなら仕方ないな……い、入れてもいいぞっ」

この期に及んで素直ではない物言いに、苦笑を浮かべたクロエは肉棒の先端を割れ目に
擦りつける。ぬめる淫裂に沿って上下に滑らせると、ニチャニチャとした粘液が生い茂っ
た陰毛に絡みつき、亀頭にチリチリとこそばゆい感触が伝わってくる。

——シヨリ、シヨリシヨリ。

「なっ……そんな、焦らすなっ……！ 酷いぞっ……ひあああっ！」

「別に、俺はどうしても入れたいとは言っていないしな？ お前が、どうして欲しいんだ？」
クロエに焦らされた少女は、恥ずかしそうに唸り声を上げるが、淫裂に感じる熱い肉棒
の感触に我慢できなくなったのか、恐る恐る口を開く。

「……わ……私は……貴公のを、私の中に……入れて欲しい、ですっ……！ は、はやくっ……はやく入れてえ……っ!!」

シズルの懇願を聞いた青年は、少しだけ手から力を抜いた。彼の手に支えられていた少女の身体が重力に引かれて下に落ちる。

——ずぶぶっ……ぶぢゅうううううううっ!

「くうううううう……んんんんっっ!」

膣口に当てられていた肉棒は、ぬかるんだ割れ目を押し開いて、一気に蜜壺を刺し貫く。路の途中に純潔を守るための抵抗は感じられず、膣奥まで怒張が侵入する。

「……え、あれ……い、痛くない……っ?」

お腹が圧迫される違和感や息苦しきはあるが、痛みはない。最初は痛いものだど情報を仕入れていた少女は、すんなりと挿入されてしまったことに戸惑いを隠せない。

そして、ふと青年を見遣ると慌てふためいた様子で言葉を捲し立て始めた。

「で、でもっ! 私はまだ誰にも身体を許してなんかいないんだ! う、嘘じゃないっ、嘘じゃないぞっ! ……なあ、信じてくれ、私はそんなふしだらな女じゃないぞっ!?!」

必死に弁明するシズル。破瓜血はかけちが流れない事実が一番混乱しているのは、きつと彼女だ。「処女の証は、激しい運動をしている人間だと、破れてしまうことがあるらしいからな。特訓を積み重ねてきたお前に膜がなくても不思議はあるまい」

信じてもらえたことに安堵し、ホッと息を吐くシズル。頑なに彼女の心の緩みをクロエ

は見逃さなかつた。

——ぶぢゅうっ！ にゅぶぶうっつ！

「ひ、はおうっ!? き、貴公っ、いきなりっ……うひゃああんっ!!」

きつい締めつけが一瞬だけ弱まった隙を突き、肉棒が少女の蜜壺を突き上げる。今まで誰にも許していない雌洞を抉り、剛剣は容赦なく肉鞘を刺し貫く。

——ぐちゅっにゅぶっぬぶっ、ぬぶぐぶっつ！

ねっとり柔らかく包み込むような感觸の妹騎士の蜜壺とは違い、天才騎士の膣はキュツキュツと小刻みにクロエのペニスをきつく握り締めては、ボコボコと凹凸の激しい膣壁を幹に擦りつける。肉棒を削られるような快感を堪え、青年は腰を上下に動かして少女の股座へと勃起を叩きつけた。

——びちんっびちんっばちんびちいっ！

淫裂から掻き出された愛液を飛び散らせながら、二人の接合部は肉を打つ音を響かせる。「うほうっ！ うひいんっ！ くふっ、ぐひいひいひいっ!! そ、そこ、いいいっ!」

龟头で膣前庭をゴリゴリと強めに擦ってやると、刺激が強すぎて目蓋の裏にチカチカと星が瞬き、シズルは咽喉を仰け反らせて嬌声を上げてしまった。

「貴公のがあっ……貴公の、お——オチンポがあっ、私の中で暴れてりゅううっ!!」

髪の毛で緊縛された乳房を振り乱して、荒馬に跨った少女は上下の口からだらしなく涎を滴らせて、初めての性交口デオに耽溺する。

——ぐちゆぐちゆりにゆぶぬぶむにゆぶつ!

彼の腰の動きに合わせて、一番気持ちよくなれるようにとシズルは無意識に尻の位置を微調整しながら交わる。天才と呼ばれるだけあるのか、セックスの呑み込みも早いようだ。「くっ、流石天才、乗馬の腕前も大したものだ。見事荒馬を啜え込んで乗りこなしている」「やあっ……なんでそんなこと言うのおっ!? く——ひ、ひやうっ!? ちよ、き、貴公っ、どこを弄ってるう……ふひやあっ!? そ、そこは、お尻のあ、なああっ!!」

——ふにゆ、むにゆふにゆっ。

膣に挿入しながら、青年は同時に尻に回した手を使い、もさもさ茂った毛を掻き分けて少女の菊門を揉み解してやると、固く閉じていた肛門が僅かに口を開ける。クロエは開いた隙間に人差し指を押し当てると、グリグリと穿る(ほじ)るように窄まりをマッサージしていく。

「くひっ、んぶう……! そ、そこだけはっ……そこだけはあっ! ぎひいいいいっ!」
——ぐっ、きゆきゆっ……ぐぐぐっ、ぬぶんっ。ぶちゆうっ!

とうとう緩んだ不浄穴に青年の指が突き刺さった。第二関節まで指をめり込ませると、青年は指先を鉤状(かぎ)に折り曲げて穴の内側をコリコリと爪で引つ掻く。微かに腸壁にこびりついた宿便を削り落とされ、敏感な肉壁をくすぐられてしまったシズルは、恥も外聞もなく大きな声を上げて快感を訴える。

「ひあうっ! や、やだあっ、お尻の穴がっ……き、気持ちいいいっ!? ふひゆううんっ——こ、これえ……くせになっちやううっ! あはああああああんっっ!」

排泄口に指を差し込まれ、腸壁を指の腹で擦られる未知の快感。まるで排便を何度も繰り返すような感覚は、潔癖気味な少女の禁忌感を煽る。背徳的快感に背筋を震わせる少女のアナルからは腸液が潤滑油となって溢れ、菊門を抉られる快感を貪欲に貪る。

「ら、らめえっ！ お——おしりいっ、しげきがちゅよしゆぎりゆううっ!!」

——ずんっ！ ぐちゅんっ、にゅぶぐちゅんっ!!

涙を流して悦びの声を上げる少女の蜜壺を深々と肉棒が突き刺す。降りて来た子宮頸部に先端をめり込ませると、シズルは涙と汗と鼻水で汚れた顔を歪めて甲高い悲鳴を叫んだ。

「はふううううんっ♪ あな……あなりゆとおっ、おま、○ちよおっ！ ふひゅっ——一緒にいっ、グリグリってほじられていっちやううっ！」

「ああっ……お、俺もっ、そろそろ出るぞ……っ！」

「ぐひいっ！ あ、あかひゃんできひゃうっ!? たねつけされてっ、わらひっ、きこうのあかひゃんはらんじやううっ!?!」

自分の言葉に興奮したのか、少女の膺は肉棒を一際きつく締めつけて射精を促す。

「そうだ、中に出してやるぞっ！ お前が妊娠するくらい濃い精液をくれてやるっ!!」

「ひゃふううううううううっ！ ら、らめらめえっ、あかひゃんらめえっ!?!」

拒絶とは裏腹に収縮する膺壁を抉り、クロエの暴君が子宮口を強引に衝く。そして、

——ごぶっ、どぶどぶっ！ ぶぶぶぶびゅっ!!

「はおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」



「も、もう駄目だ……っ！ やっぱり、レティだけなんてズルすぎるっ！」

とうとう我慢できなくなったのだろう。羨ましげに尻穴を犯されてよがるレティを見ていたシズルが、もじもじとした態度でクロエに近寄ってくる。レティの薄べったい尻肉を驚掴みにしていた青年の腕を取った少女は、小さな声で耳元へと囁きかけた。

「クロエ殿お……わ、私のあそこ、ジンジン切ないんだ……だから、滅茶苦茶にしているから、弄ってえ……っ！ うん、んんっ……むちゅう、れろれろ……」

思いの丈を告げると同時に彼の唇を奪い、口腔で熱心に舌を絡めながら、シズルは乳房の谷間に挟み込んだ逞しい腕を無毛の陰唇へと導く。

——ぐちゆるっ……ぐちいっ。

スペルマと愛液でグチャグチャのどろどろに汚れた秘密の花園はすっかりぬかるんで、膣口は何の抵抗もなくすんなりとクロエの指を呑み込んでしまう。一本では埒が明かないと察したクロエは、更に指を一本追加してシズルの緩んだ肉壺を乱暴に掻き回し始めた。

——ぐりゅっ、ぐちゅぐちゅっ、ぐにゅんっ！

「ん、んんっ！ んむううっ!? んんんんっ……ふはあっ、クロエ殿の指イイのおっ♪」
すっかり女の悦びを覚えてしまったシズルは、空いた手を使って勃起乳首から乳液を噴き出している自らの乳房を搾るように丹念に揉みしだき、蕩けるような嬌声を上げる。

「あはアっ!? そ、そこイイっ！ くふうんっ……クロエ殿お、そこきもちいいのっ！
もっとしてっ、もっどコリコリいぢめてえっ♪」

滑る肉髪を掻き分け、指先でコリコリとヘソ下の腔壁をくすぐると、ビクビクと跳ねるように身体を震わせてしまうシズル。ポニーに結った髪の毛を濡れた肌に貼りつかせながら、性感帯を弄られる快感に身を委ねる。

「えへへ……にー様あ、ボクもね？ 見てたら、我慢できなくなっちゃったあ……」

むにゅん——唐突に、背中当てられ、柔らかく押し潰された双つの乳房。ドキドキと高鳴る心臓の鼓動が厚い乳肉越しに伝わってくる。いつも何かをおねだりをしてくる時に使ってくる猫撫で声で、後ろから抱きついてきたエクエスタがクロエを見上げてくる。

「ねえ……今はヒメちゃんの手でいいからさあ……ボクのえっちなオマ○コも、いちめてよお……？ ……んっ……くふう……ふあああっ♪」

彼の返事を待てなかつたのだらう、荒い吐息を吐きながらエクエスタは己の股間を弄り、肥大した勃起クリトリスを押し潰しては艶やかな嬌声を上げている。

「まったく……仕方ない奴だな、お前も」

額に汗を浮かべながらも苦笑したクロエは、残されたもう一本の腕を後ろへとやり、淫らな声を漏らすエクエスタの太股を手探りで弄る。ゴツゴツとした感触に少女は身体を軽く震わせ、そして青年の手に自らの手を重ねて一番虐めて欲しい場所へと誘っていく。

「ひあんっ！ や、やっぱりにー様の指オチンチン、さいっこーに気持ちいいよおっ♪」

ぐちゅぐちゅと蜜壺を穿られ、エクエスタは目を細めて気持ちよさげに身体を震わせる。その間も自分の手で充血した勃起肉芽を弄ることは忘れない。腔口と肉豆の二箇所責めで、

遅れてスタートした妹騎士はどんどん性感を昂らせていく。

「にー様の背中擦れてっ……おっぱいの先っぽ、気持ちいいっ♪ ひう……くふう♪」
パンケーキのように隆起した乳暈がひくつき、コリコリと青年の背筋をくすぐる。

「そうだあ……ねえにいきまあ……男の人も、おっぱい弄られると気持ちいいのお……？」
そこでふと何かに気づき、クロエの胸板に手を伸ばすエクエスタ。厚い胸板の先端でひつそりと身を尖らせる小さな乳首を摘むと、クリクリと刺激する。

「な、何を……っ!? ごおおっ!!」

妹騎士の爪先で先端を引つ搔かれ、むずむずと痺れるような感覚が伝わる。思わず声を漏らしてしまうクロエだが、身体は素直に反応してしまった。

「あひいいいいいんっ!? い、いきなりなんれすのおっ!! クロエのおちんちんがあ、びくびくあばれんぼうさんれしゅのおっ! ま、またあっ……ひあああああっ♪」

突如びくびくと痙攣する肉棒に直腸壁を抉られ、少しずつアナル掘削の刺激に馴染み始めたレティに新たな快感が津波のように襲いかかる。抵抗することもできず、ただ大波に呑み込まれてしまったレティは悲鳴を上げながら身悶えるしかできない。

「ふあああああっ! くろええ、クロエえっ♪ おちんちんっ! クロエのおちんちんがっ、わらくひのなかれずんずんすごいいっ♪ らめええっ♪ こえ、れひやううっ♪」
——じゅぶっ、ぐちゅっ! にゅぶんっ、ぐぢゆるっ!

叫びながら尻を大きく振るせいで、狙いが定まらない肉棒は更に腸壁へと突き刺さる。

そして、レティは悲鳴を上げて身悶えし臀部を震わせる。性感を昂らせる循環回路が形成され、ぐいぐいと少女姫は高みへの階段を三段飛ばしで上っていく。

「らめえええ♪ クロエのおちんちん、わらくひのおひりのあなひろげてりゅうっ♪ うんちあなひろがっちゃうろおっ♪ ひぎいいいいいいっ♪」

「ヒメちゃあん、お尻ばかり可愛がつてもらってさ……オマ○コの穴、寂しそうにヒクヒクしてるよお……? ボク、手伝つてあげるう♪」

——じゅぷっじゅぶじゅぶっ!!

青年の乳頭を弄っていた手を下ろし、エクエスタは姫騎士のだらしなく緩んだ下の口を指で乱暴に掻き回す。攪拌されて泡立った愛液が、ぐちゃりと膣穴から溢れ零れる。

「あひいつ! くはあああつ!? え、エクエスタあつ!? なに、しゆるんれしゅのおっ!? し、しよこらめえつ! あたまが、ふつとうしひやいましゅわあつ!? ひいいいつ!!」

二つの穴を同時に責められ、レティの全身におこりのような震えが走る。口角から泡を噴き甲高い悲鳴を上げる姫騎士は、細く括れた腰を折れそうなくらい仰け反らせてしまう。

「じゃあ、ここならいいかなあ? ほらほらあっ♪」

「おまめ、つまんじやらめえええつ! ひぎいいいいいいいつ!!」

強く摘まれた股座のルビーを指の腹で転がされ、首を振りたくつて暴れる姫少女。その度、尻穴がきゆうきゆうと肉軸を強く締めつけてクロエを苛む。負けてなるものかと、青年は一層荒々しく腰を少女の尻に打ちつける。また、エクエスタとシズルの股座を弄る両

手を更に激しく動かし、親指を使って淫核を乱暴に捻り潰した。

——ぐちゅぐちゅつ、ぐぢゅんつ！ ずりゅつぐちつぎゅにゅうつ！！

「どうだレティ、尻穴……いや、ケツマ○コを犯されるのが気持ちいいかっ!?」

「ぐひいっ！ はぐつ、け、ケツマ○コいいれすわあつ！ ごりごりケツマ○コえぐられてっ!! うほおん!? ひぎいっ、ケツマ○コいぐうううう——っ!!」

普段の彼女なら言えないような卑猥な言葉を連呼し、嬌声を上げるレティ。

鼻水と涎と涙でぐしょぐしょになった顔はみっともないが、しかしそれでも彼女は美しい姫君だった。思わずクロエの胸が高鳴ってしまうほど、魅力的な美姫のアへ顔。

「クロエどのおっ！ いきなり、激しすぎいっ!? ふひいんつ、オマ○コじんじんしちやうううっ♪ らんぼうにされて、オマ○コいっちやううううううっ♪」

——ぐちゅつ、ぎにゅうつ！ にゆるにゅぶつぐぢゅんつ！ ぐりゅうつ!!

「にい様あつ、にいしやまあつ♪ じゅぼじゅぼオマ○コ掻き回されて、ボクまたとんじやいそうだよおっ♪ えつちなおまめいぢられてえ、ボク……ボクうっ！」

横と後ろからステレオで聞こえる喘ぎ声。ひっしとクロエの腕にしがみつき、崩れそうになる身体を必死に支えながら、二人の少女たちは姫騎士に負けず一直線に昂っていく。

きゅつ、きゅきゅうつ——エクスタシー寸前まで上り詰めたレティの菊穴が収縮し、腸壁が蠢いて彼の剛直を搾り上げる。強烈な収斂と蠕動に、クロエの我慢も限界だった。

「出すぞ、レティのケツマ○コに精液を出すぞっ！」



「にいひやまああつ、みんなれ、いっしょにいこうよおっ！ あひ、うひいっ♪」

「ひう、くひいっ！ くらえどのお……わらひのクリひゃん、ぎゅうつてしてえ……♪
ねえ、ぎゅうつてえ♪ わらひもお、くらえどのといっしょにかんじたいろお……っ！」

「あひいっ！ ケツマ○コに、クロエのせーえき……ちよーらいい！ はやくドピユドピ
ユおちんぼみるく、わらくひのけちゅま○こにひよーらいいいいいい——っつ！！」

——ぶびゅびゅぶっ！ びゅくくくっつ！ びゅばあああつつ！！

はしたない懇願と共に、青年の欲望汁が熱い入りとなつて姫君の直腸に吐き出される。

——がりんっ！ ぐちゅっ、ぎりゅうつ……ぐちいいいいいっ！

同時に両手は、淫花の中で爪を立てて膀胱付近の肉襞を抉るように引つ掻き、勃起したクリトリスを握り潰した。

「はひやああああああああああつっ♪ おちんぼみりゆくいっばいれてるううううう♪」

「おま、おま○こお♪ にいひやまああつ、おまんこきもちいい——んんっ♪」

「あひやはああつ♪ おなかのなかかきまわされてえ……わらひ、いっっちゃううううう♪」
——びくんっ、びくびくびくっ！ びくくっつ！

三人娘は青年の導きによって、こぞつて絶頂に達してしまふ。逞しいクロエの身体にし
がみついたまま、少女たちは咽喉も張り裂けよとばかりに艶めかしいアクメ声を上げ、そ
のまま意識を失い果ててしまふ。

しかし、氣を失つてしまつても、彼女たちの顔には幸せそうな笑みが浮かんでいた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!
- 期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

